

2021

第107号 令和2年8月21日



利根山光人
生誕 100 周年

利根山光人

Toneyama Kojin

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

令和2年度
後期企画展
のお知らせ

教育は絵のごとく ちだひろぶみ 千田浩文展

2020年8月29日(土) — 11月30日(月)

高校教育に情熱を注ぎ、現在も制作活動続ける当館専任研究員の回顧展です。

アトリエは教育現場



アトリエを背に微笑む千田浩文氏

私は「絵描き」とか「画家」と呼ばれるほどのものではない。「図画工作」「美術」の教科担当者として人を育むことを専門職として歩み続けた。幼稚園児、高校生、専門学校生、そして老人クラブや絵画教室等で指導し、人生八十代も半ばをすぎた。

高校時代の恩師及川文吾先生の縁で教育職に就いた。「教師になるなら画家になるな」という大学時代の恩師佐々木一郎先生の言葉は、その後の教職生活の指針でもあった。

高等学校文化連盟発足のきっかけとなる、第一回高等学校美術展を盛岡で開催できたことは、美術、音楽、書道の三教科選択制を県内の高校に導入することにもつながった。当時若手だった私は、開催に向け、県内を随分走り回ったものだ。

幸か不幸か30代で教頭職を拝命し、学校体制も一新した折に、私なりに学校改革とも言える仕事に専念できた。文部省の海外派遣研修も、教育への情熱を高める大きなきっかけとなった。

入試に面接試験を取り入れたこと、修学旅行では飛行機を使用し、海外も含めた選択コースを実施したこと、挨拶運動や福祉教育活動も取り入れたことなどは、県内の高校教育の先駆的な役割を果たしたと思っている。

白いキャンバスに筆を動かす感覚で教育に向き合った。

教育現場は、感動を体験できるアトリエであった。

本企画展の絵画はもう一つの私の足跡である。退職してから描いた作品も含む30点を超える作品群を見て改めて思う。

さて、これから本当の「絵描き」になろう。

千田浩文

中期企画展「戦中派の証言 ふたたび」を振り返り

戦後75年の夏は特別な夏だったと言える。コロナ禍で恒例とされる行事や風物が見送られ、我慢を強いられた。そんな中、平和祈念や戦没者追悼の時期に合わせ、テレビのニュースや新聞でも今回の企画展を取り上げていただき、その反響は大きかった。さらにはチラシの紹介文で引用させていただいた、長野県上田市の「無言館」がEテレの日曜美術館に取り上げられたのも館内の話題となった。

戦後75年にして、戦争体験の風化を恐れる声も多くなった。利根山の「戦争シリーズ」は、戦後派である我々鑑賞者の感覚を鈍化させぬよう、楔(くさび)となって熱いメッセージを送り続けてくれている。謙虚に向き合い、未来への教訓を伝えていきたいものだ。

専任研究員



水紋(2010年の作品)

～@TONE美～ 『太郎さんと光人さん』 その3



(前号からの続き)

太郎さんの芸術観は「対極主義」として有名である。「二つの極を引き裂いたまま把握する」という考え方だが、実はあの「芸術は爆発だ!!」というキャッチコピーもこの対極主義の考え方の現れで、「進歩」「発展」「調和」という望ましい人類の歴史との対極にあるのが「爆発」という考え方だったという説がある。「何も考えずにめちゃくちゃやればよい!」というそんな単純化された印象だけが一人歩きしてしまったが、深い思索の上に成り立っている。

光人さんのメキシコ訪問の強い動機などが著書「メヒコ・マ

ヒコ」には書かれている。

「そこには人間の原点ともいべきナマナマしい生きざまと古くからの文明と民俗の匂いが強く立ち込めていたからである。・・・(中略)・・・

メキシコには古いものと新しいもの、現実と超現実、生と死、明と暗といったものが程よく混合し、独自のエキゾチックな模様を織りなしている。」

「メヒコ・マヒコ」のこうした記述からも、「対極主義」はメキシコの民族に息づいていて、太郎さんの思想はここにそのルーツを求められると言ってもいいのではないかと思う。

ちなみに最近のディズニーアニメ映画「リメンバー・ミー」はメキシコが舞台で、独自の死生観や生者と死者とのつながりなどがエンターテインメントとして楽しく昇華していて興味深い。

いよいよ本題ともいべき東北との関わりで二人の画家の共通点を探ってみたい。

館には、光人さんが、ここ展勝地が見える台地にアトリエを構えようとした当時、そのときの市長、斎藤五郎氏に宛てた手紙やはがきがファイル一冊分に保管されている。流れるような達筆である上に略字でもあり、当時の書簡の礼儀を踏まえた文を読み解くのは至難の業だったが、光人さんがいかに北上を愛し、みちのく芸能まつりを愛してきたかが、市長とのやり取りでよくわかった。

来県のきっかけは県美術展の審査員を依頼されたことで、紹介されて鑑賞した鹿踊りをはじめ郷土芸能にすっかり魅了されたのは1971年、光人さん51歳のことである。以来、頻繁に北上を訪れ、地元の有志たちとの交流を重ねることになる。

「血が騒ぐ!!」を理由として太郎さんが「東北再発見の旅」をするようになったのは1950年代。秋田を皮切りに東北各地を訪れ、カメラを接写しながら「日本人とは何なのか」を鋭くえぐった。後に「東北文化論 オシラの魂」を発表したのが1962年、太郎さん51歳の時であるから、光人さん来県の年齢とぴたり重なる。(次号に続く)

専任研究員



発行 北上市まちづくり部生涯学習文化課

〒024-0061 岩手県北上市大通り1-3-1 電話 0197-72-8304 FAX 0197-63-3121